

国民的歴史学運動における「国民」化の位相

—— 加藤文三「石間をわるし^{いさま}ぶき」を手がかりとして ——

小国 喜弘

本研究は、加藤文三ら東京都立大学歴史学研究会のメンバーによって1952年に作成された農村の近代史「石間をわるしぶき」を手がかりとして、国民的歴史学運動において個人の歴史の発見とその国民化という一見相矛盾する二つの課題がどのようにして遂行されたのか明らかにすることを目指している。

加藤文三をはじめとする東京都立大学歴史学研究会の会員六名は、1952年8月11日から22日までの12日間にわたり秩父事件発祥の地である埼玉県秩父郡上吉田村（現吉田町）の沢戸集落に泊まり込み、現地の農民への詳細な聞き取りをもとにして集落に住む人々の歴史を「石間をわるしぶき」と題したパンフレットにまとめている。ここに、「貧農」と「お大尽」との対立という村内部のミクロポリティックスに焦点をあて、その権力関係の変遷を村人の固有名とともに描き出そうとする作品が歴史学の成果としてはじめて呈示されることになった。歴史学が国史学または日本史学として制度化されるなかで、歴史学の対象は主として国家規模の政治経済文化の変遷であり、地方史が取り上げられることがあっても国家の変遷との関連の中で取り上げられがちであったからである。

このような試みが行われた背後には、当時歴史学界において影響力を持っていた国民的歴史学運動の存在を認めることができる。国民的歴史学運動は民主主義科学者協会歴史部会によって1949年から56年にかけて展開された運動であり、「国民のための歴史学」の創出をスローガンとして学生や労働者を組織し、「村の歴史」「工場の歴史」「職場の歴史」「母の歴史」などを主題化し、これまで歴史学の対象からは抜け落ちてきた人々を主体とした新たな日本史像を創造することを目指していた。加藤らによる「石間をわるしぶき」は、国民的歴史

学運動の主唱者石母田正によっても高く評価され¹、国民的歴史学の代表的作品の一つと見なされてきた。

加藤文三らにとって「国民のための歴史学」を創ることは容易な作業ではなかった。加藤らはその調査の過程で「国民のための歴史学」の「国民」とは一体誰なのか、という問題に改めてつきあたることになったからである。農村に深く分け入れば分け入るほど一口に「農民」と言っても千差万別であり、さらにはたとえ「農民」をある共通のイメージにおいて語り得たとしても、その「農民」像と加藤ら学生との間には、同じ「国民」であったとしても乗り越えがたい溝が横たわっていることに彼らは気づかされることになった。にもかかわらず彼らが「国民的歴史学」を否定した形跡はない。そしてそのような国民の間の亀裂に気づいていたにもかかわらず、彼らはなんとかその破れ目を繕い、新しい「国民のための歴史学」を秩父の一農村の近代史を手がかりに創出しようとしていたのである。

近年、国民的歴史学運動は、藤岡信勝に代表される歴史修正主義との関係において再評価を迫られている。そこでは相対立する二つの見解が提示されることになった。すなわち川本隆史は、1950年代初頭の石母田正の言説を「《民族・歴史・愛国心》をめぐる連係プレー」と捉えた上で、石母田ら「民科系の研究者たちがこの運動をきちんと総括してこなかったことが、現在の『新しい歴史教科書をつくる会』の跳梁を許す遠因の一つをなしているのではないか」と述べ、国民的歴史学運動が戦後の歴史教育に与えた影響を批判的に振り返っている²。それに対して大串潤児は、本稿で取り上げる加藤文三の所論を手がかりとしながら、「一枚岩の『国民』像がゆらぐこと。そうした感覚を媒介にして、抽象的な『国民』を考えるまえに、『自分の苦しみ』から問題を出発させること。ここで、国民的歴史学運動でもっとも重要な観点が議論されていた」と述べ、この運動が国民を複数化して捉えようとする契機を含んで展開された点を積極的に評価し³、国民的歴史学運動をはじめとする「民衆自身による歴史像形成のいとなみ」を「無視」して「つくる会」の「国民の歴史」が成立した点にむしろ問題を見いだしている⁴。

以上のような研究史の状況に対して本稿は第三の立場を提示したい。すなわ

ち国民的歴史学運動に自ら関係した網野善彦がすでに指摘しているように「つくる会」の新自由主義史観は「戦後歴史学の鬼子」であり、その際、「そうした『鬼子』を生み出した『戦後歴史学』の側が、自分たちの土台自体の持っている問題、自由主義史観を生み出した自らの内包する問題を考え、それをえぐり出す必要があることは確かである⁵。我々は今日改めて戦後歴史学と歴史教育の一つの出発点ともいうべき「国民的歴史学」を取り上げ⁶、戦後の歴史学と歴史教育が暗黙の内に前提としていた事柄をナショナリズムとの関連において批判的に検討し直す必要に迫られている。ただし川本が指摘するように、国民的歴史学運動を一方的に批判の対象として取り上げることは妥当性を欠くように思われる。なぜなら、「国民的歴史学」において体制によって周縁化され抑圧されてきた人々の記憶に初めて歴史学の光があてられたのであり、「国民の歴史」に回収し得ない人々の多様な歴史的経験を歴史学の名において作品化する可能性がはじめて意識的に追究されたからである。とはいえ大串潤児の指摘も的を外している。大串の指摘では国民的歴史学運動が文字通り「国民のための歴史学」を創造することを課題として成立していたことが過小評価され、新自由主義史観を戦後歴史学の「鬼子」とであると捉える網野のような視点が不十分であるように思われる。また、加藤文三らが垣間みたものは大串のいうような国民の複数性ではなく、むしろ国民概念が解体してしまうかもしれないような概念そのものの揺らぎであったからである。

以上のような課題意識において国民的歴史学と歴史教育との関係を問い直すとする時、取り上げるべき幾つかの位相がある。まず第一に国民的歴史学と一口に言っても、それに携わった者の関心や取り上げた対象に応じて多様な作品が生まれたのであったし、第二に51年綱領に始まり、六全協で終わったとつとに評されてきたように運動全体に与えた日本共産党の文化政策の影響を議論する必要がある⁷。第三にこれまで多くの論者が指摘してきたように国民的歴史学運動の成果がその後の歴史教育の実践に継承されたこと自体が事実だとしても⁸、歴史学の成果が歴史教育へと翻案される時にいかなる変容が起きたのかを1950年代以降1990年代までの歴史教育の変遷を含めて検討する必要がある。

以上のような枠組みにおいて研究を進めていくための試論として本稿は加藤

文三による「石間をわるしぶき」を取り上げ、そこにおいて国民化からの逸脱がいかんにして発見され、そしてその逸脱がどのようにして表象の上で修復されることになったのかを検討することにしよう。国民的歴史学運動を研究するにあたって「石間をわるしぶき」にまず最初に焦点をあてるのは、国民的歴史学運動の代表作と当時から評価されていたからだけではない。都立大歴史学研究会で作成した際の中心人物であった加藤文三は⁹、1953年卒業後から1970年代にかけて歴史教育者協議会において活躍した教師としての履歴において少なくとも彼の意識の中では一貫して国民的歴史学運動を担い続けた点で¹⁰、国民的歴史学の成果が歴史教育へとどのように継承されたのかあるいはされなかったのかを知る上でも格好の素材となると思われるからである。ただし本稿では紙幅の関係もあり加藤の歴史教育実践についての本格的な検討は別の機会に譲り、加藤の歴史教育については概略のみを素描するに止める。

以下、三節の構成において検討する。第一節では、加藤文三らが農村の近代史を書くことを決意した背景と調査の過程を整理した上で、第二節では、加藤らによって「国民」内部にいかなる亀裂が発見されたのかを検討してみたい。さらに第三節では、その発見された亀裂がどのように彌縫されることになったのかを加藤らの言説に則して考えてみよう。そして結びに代えて以上の検討を踏まえつつ加藤文三において「石間をわるしぶき」の経験がどのように歴史教育へと活かされることになったのかを俯瞰してみたい。

なお、具体的な検討に入る前に本稿の対象とする資料について言及しておきたい。国民的歴史学運動を取り上げた従来の研究は運動全般を概観しようとする傾向が強く、個別の実践のモノグラフは描かれてこなかった。それは個別の実践について公刊された資料が必ずしも多くなかったという制約にも由来していた。そこで本稿では加藤文三氏や元石間小学校長の新井袈裟雄氏らへの聞き取りを行ったほか、加藤文三氏によって保管されていた手書き原稿など未発表の資料を新たに収集することに努めた。

第一節 「石間をわるしぶき」の成立過程

(1) 秩父行を決意させたもの

1952年8月11日から22日までの12日間にわたって埼玉県秩父郡上吉田村大字石間字沢戸（現吉田町）に山村調査にでかけたのは、加藤文三・庄司一喜（新制東京都立大学の第1期生）、久野澄恵・平井久子（第2期生）、丸山泰・中沢市朗（第3期生）の計6名であった。

上吉田村は、群馬県とほぼ境を接した、東京からおおよそ80キロほど離れた山間の村であり、専業農家率は14.8%（全国平均50.5%）、多くの村人は出稼ぎや近くの鉱山で賃稼ぎをして糊口をふさいでいた。この村は1884年11月に発生した秩父事件発祥の地として知られ、加藤らが訪れた沢戸集落は、秩父事件の副総理加藤織平が住んでいた地のさらに上流にある山の中腹にいわばへばりつくように53戸の家が建ち並ぶ小さな集落であった。秩父事件は、国民的歴史学運動においても国家の抑制に対する人民の先駆的抵抗として重視されていた¹¹。都立大学の歴史学研究会のメンバーであった中沢市朗は秩父出身であったことから1951年に秩父人文科学研究会を組織しており¹²、加藤文三や丸山泰ら都立大歴史学研究会の会員数名はその中沢市朗の導きにより既に1952年春に上吉田村にでかけ、現地での調査を参考にして「秩父おろし」と題する紙芝居を作成していた¹³。

1952年春にすでに調査していた沢戸集落へと再び加藤らが調査に訪れようと決意したのは何故だったのか。ここでは三点にわたって整理しておきたい。

第一に農村調査に参加した者が全員都市部の生まれ育ちであり、農村に対する好奇心が存在したことを指摘しておく必要があるだろう。筆者の聞き取り調査によれば、加藤が大学四年生の夏休みの秩父に行こうと決意した一つには「農村に対する概念はあっても、具体的な姿を知らなかった」ことにあった¹⁴。春に作成した紙芝居は好評を博したものの「出てくる人物は少しも農民らしくなく、私たち小市民の観念を反映させたものにすぎ」ないという反省が残されていた¹⁵。「国民のための歴史学」において創出すべき日本民族の典型はいわば理念化された農民であったことからすれば、加藤ら大学生は日本民族の一員であり、しかも日本民族の農民や労働者を啓蒙し解放する役割にあることを自認

していながら日本民族の典型とされる農村文化からは周縁化されていたのである。秩父に行くかどうかを決める事前の議論でも、何よりも「自分の目で農村を見て、農村の生活を体験したい」という思いで「一致」を見ることになった¹⁶。サークルの残した報告綴『沢戸部落の歴史』を見ると、彼らの秩父行はしばしば「自己変革」への熱い思いと共に語られており、調査は自らを知る旅、自らの文化的起源と改めて出会う旅としても位置づいていた。

第二に当時、農村が革命のための戦略拠点として左翼陣営に重視されていたという事実を指摘する必要がある。日本共産党の51年綱領は従来の平和革命路線を批判し、「米日反動勢力の支配」に軍事力で対抗するために「山村根拠地の建設や自衛闘争、自衛組織」などを強調し¹⁷、全学連を中心として1951年末から52年7月にかけて山村工作隊が各地の僻村に入り込み活動を展開していた。加藤らが作成した紙芝居「秩父おろし」も山村工作隊に貸し出され、1952年3月から4月にかけての東京都小河内村での検挙に際して没収されていたのであり、その点からすれば彼らも山村工作隊と一定のかかわりを持っていた。ただし加藤らは山村工作隊の活動について否定的であった。それは工作隊が農村を専ら啓蒙の対象とみなしていたからであり、加藤らは農村から学ぶという謙虚な姿勢を失うまいという教訓をそこから得ていた。とはいえ51年綱領が農村での反封建的な土地改革を中心任務としていたように、農村は日本における封建遺制の縮図と見なされていたのであり、加藤ら学生たちが秩父に行く動機の一つも自らを取り囲む封建制と向き合い直すことにおかれていた。参加者の一人平井久子は、石母田正の「母についての手紙」が「母とか愛情の問題をあまりきれいにわりきりすぎている」とし、「私が実際に体験した母、それは何かことがあると、もつときたない形で、つまり経済問題と結びついて出される」のであり、「家の経済の方が優先」されるという問題は「日本の農村の家族制度にその源をもっている」ので家族制度を「山林の所有とか、河原のこととか、そういう農村の全生活の中でとらえたい」と述べ、他の参加者の共感を呼んでいた¹⁸。農村への憧れと嫌悪を含んだ自らのまなざしに加藤は実際の調査の過程で改めて気づかされ、そして戸惑うことになるのである。

第三に「私たちは歴史学のありかたを変革するために農村に行った」と加藤

自らが語っているように、沢戸での12日間に及ぶ精査を加藤らが決意したもう一つの理由は従来の歴史学への不満であった。この中には石母田正らの歴史学も含まれる。「国民のための学問をつくってゆくにはどうしたらよいのだろうか」と彼らは悩み、そして「石母田さんたちも『新しい歴史学』ということをしているだけで、まだ具体的な成果をあげていない。それをつくってゆくのはぼくたちだ」と考えていった。同時に「新しい歴史学」の「具体的成果」を作ろうとすることは歴史学の学び方自体を変えようとの思いにも裏付けられていた。それまで加藤らは新たな歴史学の言説に無意識の内に支配されており、歴史に「抵抗とたたかいを発見するだけで満足してい」た¹⁹。秩父行は加藤らにとって学べば学ぶほど喪ってしまっていた、歴史を語るための自らの言葉を今一度取り戻す旅でもあったのである。

(2) 調査の過程

沢戸集落へ加藤ら学生六人が到着したのは8月11日のことであった。後に加藤らは自らの調査を振り返り四つの段階に整理している。それによれば各段階において目標を立て、そこで達成されなかった課題の解決を求め、さらに次の調査が計画されていた。すなわち第一段階である「子供たちを通じて調査した段階」では、加藤らは「どこにどういう家があり、その家がどういう状態なのかということが全くわからない」ことから、「子供たちと遊び、子供たちに質問しながら、沢戸部落の地図と各戸間の系図をつくってゆこう」ということになった²⁰。かくして12日から14日の間の3日間、ある者は子どもたちと花をとり山へ行き、そしてある者は紙芝居・縄跳び・鬼ごっこをして遊び、「子供の名から家号、家族数、それから子供たちと一緒に歩きまわってきた村の地図」²¹などを報告紙に書き込んでいった。

ただしこの段階では「どこが貧農かがわからなかった」し、「一つ一つの事実について、ごく大ざっぱな知識しかえられなかった」ため「知識が断片的」なままに止まった。そこで第二段階（12～14日）の「家庭を訪問して調査した段階」では調査項目を作り、それに基いて戸別訪問して質問する方式をとることになった。

第二段階（15～17日）では、村の故老から聞いた昔語りや青年から聞いた階層間の政治的な対立の具体例を通して、村の歴史と現在とのつながりに関するイメージができ、「おい、沢戸部落が動きだしてきたぞ」との喜びを感じるようになった。

第三段階（18～19日）への移行のきっかけをなしたのは、村人からの「集中的批判」だった。例えば次のような批判である。ある日、一人の学生が「Aちゃん」という隣村から遊びに来ていた子どもに「Aちゃんはオテンバだね」といったら、「そうさ、オテンバでなけりゃ百姓はできないんだぞ。おめえたちも遊んでばかりいないで、草取りでもしてみろ」と言われた。気が付いてみると加藤らは「朝起きるのは、もう農民たちが畠で一仕事して朝ごはんを食べているころ」だったし、「みんなでよく歌を歌い」、村の人達からは「お客さん扱い」を受けていた。加藤らは、「自分たちの学問に不満を感じてそれをもっと生々としたものにしようと思って農村にくるという態度、それは結局農民にとってみれば“傍観者の態度”にすぎない」ことに気づくと共に、改めて「農民に奉仕する」学問を作ろうとの初志を加藤らに確認させることになった²²。

8月18日から加藤らは3つの組に分かれて働きに出かけた。2日間というごく短い間であったが、「“助け”は私たちをすっかりつくりかえてしま」ったという。加藤の言葉を続けて引用しよう。

私たちは三〇度近くも傾斜のある石の破片のガラガラした畠で、手を傷だらけにし、腰がいたくなるのをこらえながら草取りをしました。……お風呂に入れてもらって電気もないまっくらな湯ぶねにつかりながら思いました。“ああ今日は働いたのだ。一人の農民になったのだ”と。一日の仕事の苦しさを思うと、ひとりでうれしくなってくるのでした。私たちはだんだん傍観者から脱皮して行ったのです²³。

第四段階（20～21日）では学んだことをパンフレットにまとめる作業を村の二人の青年に手伝ってもらいながら進め、21日は上吉田小学校石間分校の職員室でガリ版印刷する作業に明け暮れた。夜明けと共に刷り上がったパンフレッ

トを加藤らは、22日、「これは是非よんでほしい“村の歴史”なのだ」と説明し一軒一軒配って廻り、配り終わった後山を下りたのである²⁴。

第二節「農民のための歴史学」の誕生

パンフレット「石間をわるしぶき」はB5版にして27頁、400字詰原稿用紙に換算して約55枚ほどの分量で、明治以降の村の生活の変遷を、七節構成において描き出していた。大学でつくった学問の成果を村人に単に啓蒙するのではなく、村人から学んだことを単に大学という学問の場に持ち帰るのでもなく、村人から学んだことを通して新しい歴史学を作り上げると共に村人にその成果を還元しようとした点で「石間をわるしぶき」は「国民のための歴史学」の一つの「理想型」と見なされることになったのである。しかしその作品を今日改めて読むならば、この作品の魅力は、「国民のための歴史学」の代表例というよりはむしろ固有名をもった「農民のための歴史学」の嚆矢となった点にあるだろう。以下、「石間をわるしぶき」の特徴を具体的に確認していこう。

(1) 方針の転換

当初の加藤らの目的は、農村調査を通して「国民のための学問をつくってゆくにはどうしたらよいのだろうか」を明らかにし「歴史学のありかたを変革するため」であった²⁵。しかし調査すればするほど「国民」とは何か加藤には分からなくなってしまった。1953年7月に民主主義科学者協会主催の「国民的科学的について」と題したシンポジウムに出席した加藤は、「都会にいては農村はわからぬ。勿論農民の気持ちもわからぬというので農村に行つた。行つてみると、農村の人と自分たちの差がひどくて国民というものの実体がわからなくなつた」と報告している²⁶。加藤らは「農村の人たちが決して一律ではなく、複雑な階層構成をもっている」のであり、「階層が異なるに従って要求も異なる」ことに気づくことになった²⁷。そして米国帝国主義による日本の植民地化という石母田正ら民主主義科学者連盟の指導者の現状認識を沢戸において具体的に確かめようとしたものの、「貧農とダイジンとの対立ばかりに目を奪われ」、「日本が植民地（化：欠カ）されているという現実を、この沢戸部落で全くと

らえることができな」かった²⁸。

その中で加藤らは、「国民」のための歴史を描くのではなく、目の前の、それも地主によって抑圧され困窮している「貧農」のための歴史を描き出すことへと事実上方針を転換させている。それは中央の学者によって「国民」、あるいは「民族」として均質に語られてきた人々に再び固有名を、そして彼らの織りなす固有の歴史を記述することを意味した。ここに「国民のための歴史学」は換骨奪胎され、いわば沢戸の「貧農」のための歴史学作品が誕生することになったのである。パンフレットの構成を以下に示しておこう。

- 一、おじいさんが子供だった頃
 - 二、あげられたのろし火 —— 秩父事件のはなし ——
 - 三、明治から大正えかけてのうつりかわり
 - 四、終戦まで
 - 五、戦後生活の明暗
 - 六、農地改革をめぐつて
 - 七、歴史を、おしすゝめるもの
 - 八、子供たちの生活
 - 九、女の人たちの生活
- あとがき

取り上げられたのは、「ムコウヤマの多重郎ぢいさん」や「オカタのデンじいさん」といったこれまで決して歴史の光を当てられることのなかった人々の記憶である。例えば1942年頃から始まった戦時の供出については次のように回想される。

その当時供出に苦しんだ人は「本当に血の出る思いで供出した」と語っています。所がケイトやタツミチなどの大尽の家では供出しても余りが残りました。こうしたムジュンしたことは、供出割当が大尽の都合の良いやうに行われたことを示すものではないでしょうか。今の部落長の前進だつ

た区長にどんな人がなつたかを見てみましょう。それはケイト、中井戸、タツミチ、国太さん、オネなどの家です²⁹。

「ケイト」や「タツミチ」というのは屋号であり、特に沢戸では新井姓が多かったことから互いを屋号で呼び慣わす習慣があった。ここに記されたのはこれまで顧みられることのなかった抑圧された人々の声であり、その人々から見た村の近代の裏面史、「大尽」の搾取に対する暴露と告発であった。このような周縁化された人々の記憶をつなぎあわせる中でパンフレット「石間をわるしぶき」は、養蚕業の浸透などにより「農村が商品経済の中に深くまきこまれてゆ」き、貧富の差が激化していった日常生活の変遷を村人の固有名と共に描き出すことになったのである。

（２） 周縁化された記憶の復権

「貧農の人たちのダイジンに対する抵抗を助け、はげます」ために加藤らは日常生活の中に歴史を発見し、それを典型化するという戦略を用いた。加藤は言う。

「石間をわるしぶき」の内容は学問的に見ればきわめて不十分なのですが、それにも拘らず、私たちが、村の生活のいたるところに存在しており、村の人がそれをすっかりめずらしくもないことのように見なれている日常の現象の中に歴史を発見して、それらを集めてきて典型化し、一つの歴史作品につくると、村の人はそれぞれ歴史意識にめざめ、感動し、ダイジン（資産のある人）に対する抵抗に勇気と自信をもつようになったのです³⁰。

先にも引用した民科のシンポジウムで加藤は、「村の階級闘争という、たくさんの人がワァーとおしよせて行くことだけを考えやすいのであるが、小さな具体的な闘いが、たくさんあるということを知ることが大切だ」と述べている³¹。加藤らが1952年春に作成した「秩父おろし」の紙芝居も含め従来の「国民のための歴史学」が山城国一揆や秩父事件といった大規模な騒擾事件を

取り上げ、そこにおける民衆の抵抗を描き出そうとしたのに対し、加藤らが「石間をわるしぶき」で着目したのは、日常における「小さな具体的な闘い」であった。

人は歴史を通して現在の自らの社会的・政治的位置を意味づけているのだとしたら、「貧農」がこれまで内面化してきた歴史は、学校で学んだ国史のみではなかった。村には地主による支配を正当化するもう一つの歴史が、国家によって制度化された日本史と共犯関係を保ちながら伝えられてきた。加藤らは日常にひそむ歴史を物語化してみせることを通して農民らにこれまで正しいと信じられてきた歴史が何だったのかを自覚させ、さらにその歴史像を反転させようとしたのである。特に顕著なのは秩父事件をめぐる歴史であろう。沢戸を含む上吉田村は秩父事件発祥の地であったが、村内ではこの事件を秩父暴動と呼び、それへの参加者を「暴徒」として村内では扱ってきた。そのことに対して「石間をわるしぶき」では、次のように述べている。

このへんの人々は秩父事件のことを、秩父暴動とか暴徒とかいうことばでよんでいます。暴動とか暴徒とかいうことばは、時の政府が秩父事件に立上った人々を悪人だと思わせるために使ったことばで、私たちは正しく「秩父事件」とよぶことにしましょう³²。

その上で秩父事件が「悪人」による「暴動」ではなく生活の困窮のなかで高利貸の非道に抗議するやむない最後の手段として農民が蜂起した事件であり、それによって「秩父の高利貸の力が弱まり、日本にまがりなりにも議会と憲法ができるようになった」こと、そして参加した農民は「義民」と見なすべきであり、「私たちの祖父にこのような義民を出したことは全く誇らしいこと」であることをパンフレットは読む者に訴えていた。

ただしこれまで人知れずこっそりと伝えられてきた被抑圧者としての貧農の歴史を文字に起こし歴史学の作品に仕上げることは地主による新たな検閲と干渉を招きかねない。加藤のもとに保管された『報告綴』を改めて読むならば、「石間をわるしぶき」の作成に参加した学生の多くに残されたのは農村の歴史

を書き上げたという達成感と同時に一種の後味の悪さであった。例えば平井久子は「あの時私たちはパンフのだしかたを村の人たちに話しただろうか。もしかしたらあの人たちを不利にしたのぢやないかしらとふと感じた」「私達は何げなくしたたゞ一回きりのことが決定的な意味をもってくるかもしれない」と反省を書き記す。さらに平井は個々の地主を見れば「大尽だつて悪い人だとは思へません」と書き残していた。他にもサークルの報告綴に匿名で「農民としよに考えるというのではなく、ぼくたちの成果はこうだとおしつけている」のが実情だったのではと感想を書き記した学生もいたのである³³。

(3) 「農民のための歴史学」からの「国民のための歴史学」批判

加藤は「石間をわるしぶき」の体験を手がかりとしながら石母田正や藤間生大らの唱導する「国民のための歴史学」への批判を展開している。実践を媒介にして運動本体への自覚的な批判が展開された点に「石間をわるしぶき」のもう一つの特徴があった。

そもそも加藤は従来の実証史学に対して不満だった。いわく「歴史学を何かむずかしいもの、体系だったもの、完成したものとして考えており、いぜんとして民衆から遊離した古い学問、象牙の塔にとじこもった学問にとらわれていたし、「歴史学はだれのためのものか、ということがはっきりしていない」と感じられたからである³⁴。しかし沢戸の農村調査を経てみると、「歴史学はだれのためのものか」が不明確な点は石母田らの新しい歴史学にも共通する特徴であった。加藤によれば、改めて読み直してみた石母田正の著作は「具体性」を欠いており、「事件と抽象的な『農民』一般との関係」を描いてはいても「毎日生活している具体的な農民との関係となるとさっぱりつかめな」かった³⁵。また藤間生大の『日本古代国家』も「当時の時代の生き生きした姿」を感じられず、藤間らが批判の対象としてきた津田左右吉の「大化改新の研究」にむしろ具体性があった³⁶。

石母田らの作品も含めて既存の歴史学に不満を見出したことは加藤らに一人から歴史学を学び直す必要を感じさせるものであった。加藤らは学者の書いた文章を鵜呑みにして「具体的でないことをいう態度、あるいは事実にもとづかな

いで発言する態度」を反省し、「基本史料」に当たり直し「可能なかぎり今までの文献にあたって」みることを、すなわちこれまで書かれた研究書を出来るだけ読んでみることを新しい勉強の方針としたのである³⁷。

そのような学習法を通して加藤は改めて文献資料の価値を知ることになった。加藤の卒業論文は都立大の歴史学研究会で作成した『石間をわるしぶき』を第一部とし、『蚕糸業史についての覚え書－「村の歴史」を深めるための一つの学習－』と題した蚕糸業の江戸時代以来の展開を文書史料に基づいてまとめた研究を第二部として提出している。文書史料のみに依拠して書かれたこの加藤の卒論について藤間生大は、「加藤の場合には、一步前進したが、なお古いものを払拭しきれ」ず、「これまでの学会できめられた線から出発してしまった」と批判している³⁸。加藤の卒業論文が公刊されることがなかったため藤間の批判は憶測に基づいている。文献史料に基づく実証的な卒論が提出されたのは藤間のいうように実証史学へと加藤が後退したことに拠るのではなく加藤なりの問題意識の発展だった。彼の意図は「石間をわるしぶき」を執筆する際の暗黙の前提を今一度問い直してみることにあった。すなわち加藤によれば「『石間をわるしぶき』全体についていえる欠点は、農民が歴史をおしすすめてきたのではなく逆に歴史によつて動かされてきたかのような印象をうけること」であった。加藤が卒論において強調しようとしたのは農村の近代化における内発性であった。すなわち「資本主義を生みだしてきたものは農村における商品経済の発展なのである」として、「江戸時代いらい農民たちがどのように歴史をおしすすめて来たか」を今一度文献史料に基づいて考え直してみる点に卒論第二部の目的をおいていたのである³⁹。

以上のような「国民のための歴史学」への批判は、歴史学を学ぶとはいかなることかという問題への新たな認識を加藤らにもたらすことになった。そもそも加藤ら大学生が沢戸集落の調査を志した理由の一つは、第一節で触れたように歴史学の学習が既存の言説の消費に傾いていたことに気づき、その中で見失っていた自らの身体感覚に根ざした歴史を語る言葉を調査を通して回復することにあった。文献史学の価値を再発見した加藤らが見出したとりあえずの結論は、歴史学を学ぶことが歴史学という学問の言説共同体の中に参加する

営みであるということであった。加藤自身の言葉に則すならば、「石母田さんや藤間さんの業績の中にある欠点を見出すと共に、それらを今までの豊かな歴史学の流れの中において見るができるようになり、それらが長い史学史の中の一つの段階にすぎないのだということを理解する」ようになったのである。そして「石母田さんや藤間さんの学問に対して不満を感じ、抵抗し、それを批判しようとしているのは、私が石母田さんたちを、のりこえねばならない最良の対象としてえらび出した」からでもあった⁴⁰。「歴史学の中に歴史を発見」することを通して、加藤は歴史学を学ぶことが既存の言説を理解し習得することではなく、むしろそのような言説が作り出してきた学問の「歴史」の中に自らが参加していく試みであることを見出したのである。

第三節 弥縫される国民像

以上で検討してきたような「石間をわるしぶき」の具体的成果は加藤にとってみれば半ば意図せざる成果であったろう。加藤の願いはあくまでもよりよい「国民のための歴史学」を作ることにあつた。沢戸での調査の過程で発見された国民間の亀裂は加藤らの言説の中でなんとか修復されようとするところになった。国民の間に見出された亀裂がいかにして修復されようとしていたのか、以下三点にわたって検討してみたい。

(1) 声の消去

第一節ですでに述べたように、農村調査の目的の一つは学生たちの「自己改造」「自己変革」にあつた。参加者の一人久野澄恵も「『何かをつかみたい、自己を変革する契機としたい』という様な気持が強かつた」ことを調査の感想として書き記している。その久野が加藤の「たえざる懷疑と問題提起」に「感謝したい」と調査後に述べたことにもうかがえるように⁴¹、自己批判と懷疑は特に加藤に顕著な姿勢だった。

記録によれば、加藤らは常に反省的な姿勢を保ち続けることで調査を漸進させていった。第一節で見たように調査はそれぞれの段階で問題が摘出され、その問題への対応として次の段階が計画されていた。また自己改造、あるいは

自己批判へのあくなき追求の姿勢は新たな自己発見を促した。「国民的歴史学について」という『歴史評論』に発表された論文において加藤は「自己改造」の目的は不徹底に終わったとし、一つは「冷然たる傍観者の態度」を「脱皮しきれなかった」ことであるとした上で、二つ目の反省として次のように言う。

自己改造ということについてもう一つのことがあります。それは私たちが中農的だったということです。沢戸部落はほとんど貧農なのですが、その下に極貧農層があります。この人たちの家はほんとにボロボロで、床の上には埃がたまっており、家具らしい家具はありません。子供たちの服装も、あかにまみれた、ほころびだらけの着物をきており、頭にはシラミがわいています。私などは子供たちとあそぶときでも、そういう子より、質素ではあっても小ぎれいなみなりをした子供たちとあそんでしまいます。大人の人と話すときでも、貧農の上層のもの分りのよい人たちと話してしまいます。このことは「石間をわるしぶき」に大きなマイナスをもたらしました。私たちは一ばん苦しんでいる人の立場に立って問題をとらえることができませんでした。……そこに生ま生ましい現実感が欠けているのは、私たちの立場の不徹底さによるものです⁴²。

「農民の生活の苦しさをしり、農民に奉仕しなければならない」と思って沢戸に行った加藤らは、自らが「中農」的であり、しかも貧農に対する忌避感情を持っているという認めたくない事実に変更して直面することになった。自らの「中農」的出自をどのように捉えるかは加藤らにとって困難な課題であったろう。そもそも「中農」的であること自体は悪いこととは言いきれまい。陸軍将校の父を持ち、陸軍幼年学校を経て武蔵高校、そして都立大学へと学歴を重ねた加藤が貧農に対する嫌悪の感情を無意識裡に持ったとしても無理からぬ部分もあるだろう。これまで周縁化され抑圧されてきた村人の記憶をパンフレットにまとめるという作業は、加藤ら幸運にも大学に進学し一定の学問的な修練を経た者で、しかも「貧農」に共感を持ちつつもやや彼らからは距離を感じている者だからこそなしえたという要素もあった。重要なのは自らが「中農」的で

ある事実をむやみに消去してしまうのではなく、その事実を反省的に認識しつつ「貧農」とされる人々の抵抗と闘争を援助することであつたろう。沢戸集落の人々も必ずしも加藤らが「中農」的であることを非難していたわけではない。大学生を冷ややかにみつめる村人もいたがむしろ大学生という村人からみれば特権的な位置にありながらも「気取らない姿」で村人のことを真摯に考えようとしていたことに感銘を受けた村人も居たのである⁴³。

しかし加藤が理想としていたのはあくまで貧農との一体化であつた。加藤によれば「もっとも大切なことは、歴史学にとって唯一つの源泉である農民の生活の中に私たちが入りこみ、私たちの思想・感情を農民の思想・感情と一つにし、農民の生活をほんとうに理解することです。そうしうるために自己改造をしなければならないということ」であつた⁴⁴。その点からいえば沢戸での調査は「立場の不徹底さ」があり、さらなる「自己改造」の必要という課題を残すものであつた。しかし翻ってみるに個々人のおかれた社会的・政治的な位置こそがその人の声や経験に固有性を与えているのだとしたら、「自己改造」を通じて貧農と「同化」⁴⁵しようとする志向性は期せずして加藤の声や経験を、そして彼の主体を消し去ろうとすることになったのではなかろうか。いやそればかりではない。一体化しようとした「農民」からも「豪農」や「中農」が捨象され、さらに「貧農」内部の多様性も均質化されてとらえられようとしていた。「中農」的な我の「自己改造」とそれと表裏一体の関係にある「貧農」への同一化という願望を通して、少なくとも表象のレベルにおいては、一体化された「日本民族」という観念が改めて再創造されようとしていた。

(2) 山民の文化

さらに「農民」は事実上稲作農耕民として捉えられていた。しかし沢戸集落は秩父の山間の寒村であり、稲作よりも畑作が主流であり、さらに山の文化を濃厚に保持した地域であつた。民俗学者坪井洋文によれば一般的に稲作農耕が「日本文化一元論」において表象することが容易であつたのに対し、畑作からはより多様な文化が見えてくるのであり、さらに山の文化からみえてくるのは「日本文化多元論」であつた⁴⁶。加藤らが焼き畑に山の文化独自の慣行を見出し

ていたならば、「日本民族」の文化の典型をたとえ「農民」に見出していたとしても、その文化を坪井洋文のいう「多元論」において描き出すことも可能であったかもしれない。しかし、平井久子は調査後の感想として「手伝いに入ったときも『田』『家』をみることはできたが、『山』との関連はとらえられなかった。キンセイがとれない」と書き残したように⁴⁷、調査期間の関係もあり、山の文化については調査が十分な調査が行われなかったのである。

(3)「苦しさ」による連帯

以上見てきたように、調査者自身の声や経験が、そして調査対象となった農民たちの階層や文化の多様性が、加藤らの言説からは最終的に消されていくことになった。その消された隙間を新たに埋めたのは、「苦しさ」による連帯であった⁴⁸。いわば受苦の連帯による粘着的な共同性の回復を通して、加藤は民族の一体性を回復しようとしたように思われる。

先に述べたように、沢戸部落から帰ってからの加藤を悩ましたのは、「私たちが学校を生活の場としてもった学生であり、村の人が農村を生活の場としてもった農民でありながら、しかも同時に私たちが学生と農民とが一つの民族であるということが可能でなければならぬ」という問題であった。この問いを解決する糸口を与えることになったきっかけは学生としての自らの「生活の矛盾」であった。加藤は、卒業を控えた1952年秋、「つまらないといって授業を欠席していると、その先生は単位をくれない」「生きてゆくために、つまらない思いながら授業に出席し、ペンを走らせなければならない」状況に直面したとき、次のような「ひらめき」が生まれることになったという。

私の中には、貧農にたいする連帯感というか、同じ悩みをもつものとしての親近感が生まれました。私は民族を発見したと思いました。私は農村においてではなく、学校の中で、私自身の悩みの中に民族の悩みを見出したのです⁴⁹。

加藤は「自分自身の生活」の悩みと矛盾に農民の悩みと矛盾との同質性を発見し、そこに農民との連帯と共感を成立させ、「民族」を回復しようと模索していた。しかし加藤の悩みと沢戸の貧農の悩みとは加藤の考えるように容易に連帯可能ではなかっただろう。事実平井久子は「娘さん」に「昼間の大学にしていると云うことは大きなおどろきをもってききかえされました。この部落には高校生さえいなかったのです」と記している⁵⁰。当時の大学進学率は全国平均でさえ7%ほどであり⁵¹、沢戸部落においては地主の家庭を含めて0%だった。そして大学卒業者はホワイトカラーとして管理層に入り、村の人々は最底辺の労働力として出稼ぎに出る。たとえ加藤が自らの苦しみから貧農の苦しみに共感し得たとしても、貧農から見れば両者の苦しみは明らかに階層差を含んでいただろう。しかし加藤は先の発言に続けて、石母田正の「所論があまりにもきれいごとで」、「石母田さん自身の生活の苦しみ、研究の矛盾について書いておられない」ことを批判し、「安定した生活と、研究室とを与えられた学者のわがまま」と指弾した上で次のように言う。

農民の生活の苦しさをしり、農民に奉仕しなければならないという事だけでは、歴史家は、農民に同情した一人の良心的なインテリゲンチァとして存在しているにすぎません。自分自身の生活の苦しさで矛盾の中に、同時に農民の苦しみと矛盾を発見してはじめて、その歴史家は同じ民族の一員として存在することができます。

この主張は、谷口雅子ら先行研究の中で石母田を乗り越えようとするものとして好意的に受け止められてきた。確かに若き加藤が懸命に石母田を乗り越え学問を前に進めようとする姿勢は共感し得る要素を含んでいる。しかし私は、ここに石母田と違った論理における「民族」の再創造を読みとてみたい。すなわち加藤の指摘を援用すれば、石母田は抽象的な農民一般を描き出し、そこに「民族」の共通の経験と苦難を見出そうとしていた。それに対して加藤は徹底的に自らの体験の淵に下降し、そこでの「苦しさ」という実感にこだわることを通して「民族」の再創造を果たそうとしていたといえるのではないだろう

か。ただしそれは加藤がせっかく農村で見出した貧農と大尽との間の経済的かつ政治的対立，学生と農民との階層差といった問題を無化してしまうことになったのであり，このとき加藤という研究主体と農民という研究対象の固有性はどちらも「苦しさと矛盾」の連帯という撞着的接合により捨象されてしまうことになったように思われるのである。

おわりに

加藤文三らは沢戸集落の「貧民」とされた人々を言うならば二重にも三重にも抑圧され排除された人々として描き出していた。すなわち山間の寒村であった沢戸集落に住んでいる人々自体，製糸業の流通過程に顕著に見られるように「独占資本」による搾取の対象であり，そして集落内部において「貧民」は「大尽」から抑圧されていた。さらにいえば1952年サンフランシスコ講和条約後も米軍の駐留が続く中で日本自体が事実上の植民地状態に置かれていると認識されていた。そのような状況の中で加藤文三らが作成したパンフレット「石間をわるしぶき」は，これまで聞き届けられることのなかった周縁化された人々の声に耳を澄まし，そこに伝承されてきた歴史を掘り上げようとするようになった。そこには，国民的歴史学運動が無意識の前提としてきた均質な「国民」概念を破砕し，人々の記憶の中の歴史を「歴史学の作品」として描き出す可能性が生じていた。そのような歴史学における革新的作品はまた沢戸集落の人々に対しては一種の社会教育たりえていた⁵²。加藤らの試みは，ブラジルの農村でフレイレが農民によって内面化されている物語を識字を通して対象化させ変革しようとした実践を彷彿とさせる。特に秩父事件にまつわる伝承に見られるように，沢戸集落の「貧民」の記憶の中にも支配者の歴史観を既に内面化しているものが多々見られたのであり，加藤らの試みもまた，日常生活にひそむ歴史を物語として典型化して表現し，それを読む人々に自らが内面化している歴史がいかなるものなのかを対象化させ，自らの内に潜む抑圧者の歴史観を自覚化させると同時にその抑圧者の歴史に代えて「貧農」らに被抑圧者の歴史を新たに対置しようとするものであった。

興味深いのは以上のような実践が，加藤文三自身の主観的な意図の中ではよ

りよい「国民のための歴史学」を作ろうとする営為の一環であったという事実であろう。ここで思い出したいのは加藤らが農村文化に対してねじれた眼差しを向けていたことである。すなわち彼らは農村文化を民族文化の源流として憧憬の念で捉える一方で、封建制の温床として否定的な視線をも向けていたのである。民族文化への憧憬は農民との「同化」の主張となって調査者である加藤らの声や経験を捨象することに、もう一つの否定的視線は現実の地主－小作関係の中に封建制の象徴を見出し、村落生活の様々な場面を搾取する地主と搾取される小作との対立へと還元してしまうことになった。そしてそのような搾取される小作は、独占資本によって搾取される都市民としての加藤らと重ね合わされて、「苦しみ」の連帯という撞着的な接合により国民の一体性・均質性が強調されてしまうことになったのだ。いったん見出された被抑圧者としての「貧農」の声、そこに潜む記憶の固有性は改めて捨象されようとするようになった。

紙幅の関係もあり素描に止めざるを得ないが、以上の問題構成は、1953年に中学校教師となった加藤の初期の教育実践の中にも見え隠れしている。大学生としての加藤文三の活躍も目覚ましかったが、教師としての加藤の活躍にも目を見開かされるものがある。東京都江東区砂町第二中学校に赴任した教職一年目、子ども達と地域の歴史を調べて『起重機』と題する文集を作り、二年目から三年目にかけては子どもに父母への詳細な聞き取りをさせ、これまた『母の歴史』と題した歴史文集を作成している。文集『起重機』は1954年度の日本作文の会による全国文集コンクールで入賞し、「母の歴史」は『歴史地理教育』に掲載されて話題となり、加藤が教えた学級の父母を交えた座談会まで機関誌上で企画されることになった。

これらの実践において市井の、とりわけより抑圧された人々に共感を寄せ、そのような人々の記憶の発掘を通して新しい歴史を作り上げようとする点に関しては学生時代から一貫しており、いわば「国民のための歴史」の教育の名目の下に、これまでの「国民の歴史」からは排除されてきた人々の記憶を発掘し続けた。しかしそれは日本史という枠組みを否定するものではなく、「自分たちの祖国というものについてのまとまった、愛情のこもった認識」を生み出そ

うとする⁵³、下からの新しいナショナリズム運動の形態をとっていた。さらにいえばこれまで排除されてきた人々の記憶を丹念にたどるなかで発見されることになる「国民」像の亀裂を「苦しみ」による連帯を通して修復しようとする論法もその後の加藤の歴史教育の中に垣間見える。例えば1954年の「母の歴史」の実践の中では、半ば意図せざる結果であったとはいえ「一寸した小さな希望もすぐダメになってしまう。そういう苦勞の連続」を描き出し⁵⁴、「日本」の母たちが「一つの共通した歴史を背負って生活してきた」ことを子どもに学習させることになった⁵⁵。さらに「苦しみ」の連帯は、時に日本という範域を越えてアジアの人民の連帯へと適用される場合もあった。1964年歴史学研究会大会での報告文として執筆された「歴史教育における戦争の問題」の中で加藤は、「帝国主義」と「人民」とを区別し、日本と中国の「人民」を共に「帝国主義」の犠牲者と見なして「アジア諸国の人民の国際連帯の精神を日本の子どもたちにつちかわせる教育」の必要を提唱していた⁵⁶。

ところですでに冒頭で紹介した網野善彦が述べているように「新自由主義史観」が国民的歴史学に一つの起点をもつ「戦後歴史学」の「鬼子」であり、また加藤文三自身が述べているように彼が『『国民的歴史学』の時代に生まれ落ちた鬼子」なのだとしたら⁵⁷、国民的歴史学運動の二つの「鬼子」はどのように連続しているのだろうか。ここまで書き進めたとき、はたと筆を止め改めて困惑せざるを得ない。それは以上のような問いの立て方自体が、恐らくこの拙い論考を読むことになるであろう加藤を著しく当惑させるであろうことを配慮してばかりではない。実際、国民的歴史学運動・加藤文三・「新自由主義史観」、この三つの点をつなぐ糸を発見することは不可能ではない。例えば下からのナショナリズムとして議論が展開された点において、国民＝民族と捉えた上で国民像を最終的には一枚岩として描き出そうと傾向が強く、その中で列島内部の在日韓国朝鮮人・中国人らの存在が捨象されがちであった点において⁵⁸、その際戦時の、それも特に国外での「日本人」による加害の事実を正当に評価することを怠りがちであった点において⁵⁹、三者の共通性を見出すことはできるように思われる。いやここに指摘した共通性は三者に止まる問題では断じてない。むしろ先に指摘した網野善彦の指摘にもあるように戦後歴史学そのものにはら

まれた問題として捉えるべきであろう⁶⁰。

しかしこのような共通性をたとえ列举したとしても、現実の加藤文三が「新自由主義史観」を支持するような事態が出来るとは到底思えないのだ。両者には以上のような共通性もありながら同時に越えがたい断層がある。だとすれば、加藤文三と新自由主義史観という国民的歴史学運動をめぐるふたつの「鬼子」を鋭く分かつポイントは何なのかを改めて問う必要があるだろう。さしあたり指摘し得るのは、加藤が「国民のための歴史学」を描くにあたって、国民の一体性の修復を目指しながらも、常に支配者と民衆という二分法をとり、後者による前者への告発という姿勢を一貫させていた点であろう。正確にいうならば、いったん二分した上で、後者のみを国民と認定し、前者を国民から排除するという論法を採用していた。このような二分法は戦後歴史学においても特徴的な思考法であった⁶¹。しかしこのような二分法の思考は新自由主義史観の論者からは消えている。いわばこの二分法において国民を捉える思考が消えたとき、国民的歴史学にはらまれた「国民のための歴史」の語りは新自由主義史観をその不肖の「鬼子」として持つことになったのではなかろうか。

注

- 1 石母田正「あとがきー若い地質家からなにを学ぶか」井尻正二編『ともに学ぶよろこびー団体研究の方法』、東京大学出版会、1953年、314頁。
- 2 川本隆史「民族・歴史・愛国心ー『歴史教科書論争』を歴史的に相対化するために」小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』、東京大学出版会、1998年、165ー68頁。
- 3 大串潤児「国民的歴史学運動の思想・序説」『歴史評論』613号、2001年5月、9頁。
- 4 大串潤児「民衆は歴史をどう学び綴ってきたかー民衆と歴史学の戦後史」「教科書に真実と自由を」連絡会編『徹底批判「国民の歴史」』、大月書店、2000年、78頁。
- 5 網野善彦「人類史的転換期のなかの歴史学と日本社会（下）」『神奈川評論』39号、2001年7月、137頁。
- 6 国民的歴史学運動の成果が歴史教育実践の中に継承された点については、板橋たづ「国民的歴史学とその運動について」『歴史地理教育』176号、1971年1月。谷口雅子「国民的歴史学運動にまなぶ歴史教育実践」『歴史評論』1980年8月。
- 7 例えば村田栄一『戦後教育論ー国民教育批判の思想と主体』、評論社、1970年、67ー68頁。

- 8 注6参照。
- 9 加藤が事実上の中心人物であったことについては、丸山久子「草創のころ」東京都立大学歴史学研究室談話会『談話会会報』第10号，1999年，4頁。
- 10 加藤は後に次のように述べている。「私は、『国民的歴史学』の運動が『挫折』したことなど知らなかったし、『挫折感』などはまったくなかった。……一九五三年四月から，江東区立第二砂町中学校の教職に立ち，その生徒と砂町の地域のなかで、『国民的歴史学』の運動でみがかれた感性と理論をどう発展させるかに情熱をかたむけ，今日まできたのである」。加藤文三「第二章の論文について」『石間をわるしぶき ― 国民的歴史学と歴史教育』，地歴社，1973年，347頁。
- 11 例えば、『歴史評論』(37号，1952年6・7月号)の「義民特集」の各論文を参照した。
- 12 中沢市朗・古川利夫「秩父における歴史の研究会」『歴史評論』37号，1952年6・7月。
- 13 東京大学歴史学研究会の「山城国一揆」や京都大学歴史学研究会の「祇園祭」のように，一揆や民間騒動における民衆の抵抗ぶりを紙芝居に仕立て，それを農民や労働者に見せて彼らを啓蒙するのは大学生による歴史学研究会における，小さな流行であった(新制東大歴史学研究会「“山城物語”を製作して」『歴史評論』36号，1952年5月。民科・京都歴史部会「紙芝居『祇園祭』を創って」『歴史評論』39号，1952年10月。民主主義科学者協会京都支部歴史部会『祇園祭』，東京大学出版会，1953年)。
- 14 加藤文三氏への聞き取り調査は，2001年10月3日と同年10月8日の二回にわたって行った。
- 15 加藤文三「国民的歴史学について」『歴史評論』44号，1953年4月，66頁。
- 16 東京都立大学歴史学研究会『私たちが体験したこと“沢戸部落の歴史”をつくって(上)』，手筆未発表原稿，1952年，3頁(加藤文三氏所蔵)。
- 17 日本共産党『日本共産党の六十年』上，新日本文庫，1983年，224-27頁。
- 18 東京都立大学歴史学研究会『私たちが体験したこと“沢戸部落の歴史”をつくって(上)』，手筆未発表原稿，1952年，6頁(加藤文三氏所蔵)。
- 19 加藤文三「国民的歴史学について」66頁。
- 20 都立大学歴史学研究会『私たちが体験したこと』9頁。
- 21 平井久子「私たちが体験したこと」『石間をわるしぶき』31頁。
- 22 加藤「国民的歴史学について」70-71頁。
- 23 加藤「国民的歴史学について」71頁。
- 24 平井久子「私たちが体験したこと」36-37頁。
- 25 加藤「国民的歴史学について」67頁。
- 26 藤間生大『歴史と実践』，大月書店，1955年，112頁。

- 27 加藤「国民的歴史学について」80-81頁。
- 28 都立大学歴史学研究会『私たちが体験したこと』21頁。
- 29 東京都立大学歴史学研究会編『石間をわるしぶき-沢戸部落の歴史』, 1952年, 11頁。
- 30 加藤「国民的歴史学について」79頁。
- 31 藤間『歴史と実践』, 120頁。
- 32 東京都立大学歴史学研究会編『石間をわるしぶき』, 5頁。
- 33 以上, 報告綴『沢戸部落の歴史』, 手筆原稿, 1952年8月, 加藤文三所蔵。
- 34 加藤「“石間をわるしぶき”に寄せられた批判について」『歴史評論』40号, 1952年11月, 95頁。
- 35 加藤「国民的歴史学について」73頁。
- 36 加藤「国民的歴史学について」75頁。
- 37 加藤「国民的歴史学について」74頁。
- 38 藤間『歴史と実践』166頁。
- 39 加藤『蚕糸業史についての覚え書-『村の歴史』を深めるための一つの学習-』, 東京都立大学提出, 1953年, 東京都立大学人文学部史学科所蔵。
- 40 加藤「国民的歴史学について」76頁。
- 41 久野澄恵「『報告』をよんで」『沢戸部落の歴史』。
- 42 加藤「国民的歴史学について」77頁。
- 43 加藤「国民的歴史学について」72頁。
- 44 加藤「国民的歴史学について」76-77頁。
- 45 加藤「国民的歴史学について」70頁。
- 46 坪井洋文『イモと日本人』, 未来社, 1989年。
- 47 報告綴『沢戸部落の歴史』。
- 48 「はじめに」で述べたように, 大串潤二は加藤文三の言説の分析の中で「一枚岩の『国民』像がゆらぐ」という「感覚を媒介にして, 抽象的な『国民』を考えるまえに, 『自分の苦しみ』から問題を出発させること」を「国民的歴史学運動で最も重要な観点」と述べ, 「人間存在の複雑性への関心と, 自己をとりまく歴史や問題状況に対する態度」を積極的によみとっている(大串潤二「国民的歴史学運動の思想・序説」9-10頁)。しかし筆者は「自分の苦しみ」から問題を出発させる」という思考法がいったんはゆらいだ「国民」像を修復させると共に, 研究者と研究対象の「主体」の固有性を捨象することに機能したのではないかと考えている。
- 49 加藤「国民的歴史学について」83頁。
- 50 平井久子「私たちが体験したこと」35頁。
- 51 文部省調査局統計課『学校基本調査報告書』(文部省, 1952年, 24頁)から推計し

た。

- 52 加藤らの取り組みを直接分析した訳ではないが、国民的歴史学運動がもった社会教育実践としての拡がりについては、大串隆吉による優れた分析がある。例えば大串隆吉「一九五〇年代の自己教育運動」藤田秀雄・大串隆吉編『日本社会教育史』，エイデル出版社，1984年。
- 53 加藤文三「郷土の事実に学ぶ」『石間をわるしぶき』，地歴社，1973年，109頁。
- 54 座談会「“母の歴史”をめぐって」における加藤の発言部分，『歴史地理教育』9号，1955年6月号，45頁。
- 55 加藤文三「父母の経験に学ぶ」『石間をわるしぶき』，115頁。
- 56 加藤文三「歴史教育における戦争の問題」『歴史教育論の展開』，新日本出版社，1973（1964）年，183-185頁。
- 57 加藤文三「解説」遠山茂樹『歴史学から歴史教育へ』，岩崎書店，1980年，273-74頁。
- 58 ただし1970年代以降の加藤は，文化人類学の成果を吸収しながら，「日本民族そのものが単一なのではない」という認識に至っている（対談「日本文化論を問う（下）」『文化評論』216号，1979年4月，165頁）。
- 59 ただし例えば先に引用した1964年発表の「歴史教育における戦争の問題」に対する反響の一つとして，沖縄の教師から沖縄の人々が帝国主義の犠牲者であると同時にかつて帝国主義の先兵でもあった事実をつきつけられ，「『冷水をあびせられた』感をいだいた」と後に記しており，被害と加害の入り組んだ関係についてもこの頃から加藤は気づきはじめていったように思われる（加藤文三「戦争の学習をめぐって」『歴史教育論の展開』293頁）。
- 60 例えば，酒井直樹「日本史と国民的責任」歴史と方法編集委員会編『歴史と方法4 帝国と国民国家』，青木書店，2000年。
- 61 酒井前掲論文参照のこと。

謝辞：本論文執筆にあたり加藤文三氏，新井袈裟雄氏，丸山久子氏（旧姓平井）に聞き取りの協力を得た他，加藤氏からは資料の提供を得た。ここに記して感謝の意を表したい。なお本論文は，平成13年度学術振興会科学研究費若手奨励研究Cの助成を受けている。